
ダイヤモンド&パール

どらどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイヤモンド&パール

【Nコード】

N1418BA

【作者名】

どらどら

【あらすじ】

今年で13歳になる主人公、いつものように幼なじみに強引に引っ張られていかれる。

そこで主人公は人生が百八十度かわることになる。

出会いと出発（前書き）

ポケモンの二次創作です、暖かい目で見てください。

出会いと出発

『結局のところ捜索隊の努力も虚しく、めずらしい色違いのギャラドス姿はひとめ目撃することさえ出来なかったものでありました・・・では、続いてのニュースです』

「へえーそうなんや、1度くらい見てみたいなあ〜」
そう呟くのはこの家の一人娘、名前はホタル。

今年で13歳になる少女で、髪は茶色で肩までのばしてある。

ホタルテレビから目をそらすと、時計に目をやる

「まだ8時30分かあ〜、まあ取り敢えず着替えますか〜」

ホタルはさう呟きながら、いそいそと着替えをはじめ。

着替えていると、部屋のドアのノック音が聞こえてくる。

まあ、説明せずともわかるがホタルの母である。

「ホタル〜起きてる、入るわよ?」

「んー、ええよ〜」

その一言を聞き部屋に入る

「あら、着替えていたの?」

「うん、そつやで？で、どうしたん？」

「ああ、そうそうさっきトウマ君が来てたわよ？何だか急いでるようだったわ」

「トウマが？何の用やる約束の覚えはないねんけどなあ？」

ホタルは首を傾げながら聞きなおす。

「あら、そうなの？まあ何だか急ぎの用だったからトウマ君の家に行ってあげなさい？」

「うーん、まあそうするわ」

そう言うトホタルは又用意を再開する。

「それじゃあお母さんはリビングにいるから」

「はいはい」

それから数分後着替えと用意をすまし、家をでてトウマの家に向かった。

家をでると直ぐにトウマの家に向かいインターホンを押す。

「トーオーマー、ホタルが来てあげたよ」

ホタルの呼び声が聞こえたのか、すぐにドアが開くそして開口一番に・・・

「おそい！おそすぎる、俺を又せるなんていい度胸じゃないか！ホタル！」

と、怒鳴られたホタルは・・・

「ええーそうでもないやろ？いきなり呼び出しといて、これでも急いだ・・・はず」

と、語尾を弱めに目の前にいる金髪モジャモジャ頭の少年トウマは言い返す。

「言い訳無用！てい！」

そついうと、ホタルの頭にチョップを入れる。

「あいた！なにするん！？」「言い訳した分だ、それより今からシンジ湖に行くぞ？何しにかわかるだろ？」

と少しにやけ面にたいし、当然と言った態度をとるホタル。

「シンジ湖で魚釣りでしょ？」

「何でだよ！」

「え、違うん？」

「当たり前だろ！？」

トウマはため息をつきながらホタルの頬をつかみ引つ張る。

「ふゃ、にやにするんねゃー！」

「シンジ湖に行って赤いギャラドスをさ・が・す・ん・だ・よ！わかったか？」

そう言いながら、尚も引つ張る。

「ひゃい、ひょうかい！」

「なら、よし！じゃあ俺はカバンとってくるから先にシンジ湖に行つてくれよ？」

トウマはそう言つて手を離し、自分の家に入つていった。

「ううゝ、バカトウマめ引つ張ることないやん！」

引つ張られ赤くなった頬をさすりながら嘆きながら、シンジ湖に向かう。

「ううゝ、痛いなあいつか仕返ししてやるからなあゝ」

そう嘆いているうちに、シンジ湖につく。

ついですぐに目に入つたのは湖ではなく、白髪の渋い顔をした老人と赤い帽子をかぶった少年だった。

「博士、この辺の調査はもういいでしょ？」

赤い帽子をかぶった少年は、白髪の老人のことを博士と呼びながらそう言う。

「ふむ、そうだなこの辺でいいだろ行こうかミサカ君・・・」博士はうなずき、今まで見ていたシンジ湖から顔をそらし出口に振り向く。

博士が振り向くとその光景を眺めていたホタルと目があう。

「おや？君はそこで何をしているのかな？」

「え、あはい、えーとシンジ湖に遊びに来たと言つか何というやろか・・・」

少ししどろもどろになりながら、返事を返すホタル。

「そうか・・・、まあ遊ぶのはいいが草むらには入らないようにしなさい」

「あ、はい了解です」

その返事を聞くと、博士と呼ばれた老人とミサカと呼ばれた少年はシンジ湖からでていく。

それと入れ違いにトウマが入ってくる。

「悪い悪い、手間取った」
と、軽い乗りで肩を叩く。

だが、ほぼ無反応のホタルに対し手をホタルの顔の前にやり呼び掛ける。

「おい、ホータルどうした？」

「ふえ、何？てトウマいつ来たん！？」

「いやいや、さっきついたばかりか？なんかあったのか、俺もここにくる前にオッサンと少年とすれ違ったがそいつらになんかされたか？」

少し心配そうに聞くトウマに対し、ホタルは笑顔で返す。

「うんうん、何もされてないよそれより赤いギャラドス探すんやろ？さ、探そうか！」

「まあいいか、そうだな探すか！」

その後、2人で2時間ぐらい探したが当然のごとく見つからずそろそろお開きにしようとしていた。

だが、2人は集中しすぎて気づかなかった、知らず知らずの内に草むらの中に入っていることに。

「うーん、見つからないな？やっぱそんな簡単に出て来てくれないか？」

「そらそうや、見つかったら搜索隊が泣いてまうよ？」

「そら、そうか！」

たわいのない会話をする2人。

「じゃあ、かえろあれ？」

「ん、どうしたホタル」

「いや、ウチの目がおかしいのかも知れんけどあそこに青い髪の女の人？」

ホタルはそう言いながら指をさす。

「女の人？どこに？」

「ほらそこ、シンジ湖の洞窟の前にてあ、落ちた・・・て言ってる場合じゃないやん！助けてあげな！」ホタルはそう言つと、背負っていたカバン投げ捨て湖に飛び込んだ。

「あのバカ！湖にはポケモンがいるだぞ！」

そんなことを言っていると、足のところを突かれる。

「んん？誰だよ今忙しいんだよ後にしろ」

そのトウマの言葉を聞いても、まだ足を突く。

「たく、ひつこいな！忙しいって言って・・・るだ・・・ろ？」

トウマはイラつきながら振りむくが、次の瞬間には目が点になる・・・

・
「あ、あれ、な、なんで君たちがいるのですか？ムックルさん」

そう、トウマが振り返り見たものは2羽のムックルであった。

ムックル達はトウマと目が合うと、突然襲ってきた。ムックルは低空飛行で体当たりしてくる、それをトウマは華麗にかわそうとするが何かにつまづきこけてかわすことになる。

「ぐお！？いつてえー何だよこれ！」

トウマはつまづいたものと見ると、そこにはカバンの中にモンスターボールが3つ入っていた。

「こ、これは、でも人のだしええい、悩んでいる場合じゃないウラ！」

1つボールを取ると草むらに投げ付けた。

モンスターボールは2つにわれナエトルがでてきた。
ナエトルは1鳴きすると、トウマの方に向き指示を待つような顔？をする。

一方トウマがムックルと奮闘してる頃、ホタルは落ちて沈んでいく

少女を助けようとする真つ最中だった。（早く救けないと、早くもっと早く）

そう願うも、そこはやはり13歳の少女いくら頑張っても追い付かない。

（く、追い付かへん、それに息が・・・）

そんなことを考えていると、ホタルの下をを何かがうごいた、それに気づき下を見下げると・・・そこには。

（あ、ああ、あれはあ、赤いギャラドス！！？まさかこんな時に！）

そう、ホタルの真下をとおったのは赤いギャラドス。

赤いギャラドスを見たホタル一瞬死を覚悟した・・・

だが、少し様子が違った赤いギャラドスは襲ってくる様子はなく、逆に2人を助けようとしているようにみえた。

そして、赤いギャラドスは2人を背中に乗せるようにして浮き上がったのだ・・・

赤いギャラドスは顔を上げず、背中だけを浮き上がらせたのでトウマには気づけなかった。

「ぷはぁー、ケホケホ！死ぬかと思ったわ！！ああ、そんなことよりさっきの子わ？」

ホタルは青髪の少女を見つけると、赤いギャラドスの背中の上を渡つていき、青髪の少女の近かずき肩によりかかりさせるように抱きよせ岸にあがる

「と、トウマ救けてきたよってどないしたん!？」

ホタルはトウマの現状を確認するとは驚きの声を上げる。

「おお、お帰りホタル帰ってきたとこ悪いが手伝ってくれ」ホタルに気づきトウマは残りのモンスターボールを1つつかみ投げる。

「わわ、いきなりなに?てかこれどこで？」

モンスターボールあわてて受け取ると、トウマに質問する

「話は後、今は現状打破するのがさきだそれを投げ付けろ」

「わ、わかった、とう!」

ボールを投げると、中からポッチャマが出てきた

「ポッチャマー!」

元気よく叫ぶとポッチャマはホタルのところに向かい、ナエトルと同じように指示を待つ。

「ど、どうしたらいいん？」

「取り敢えず何か指示出せ!」

「う、うん！」

そう返事を出すと、指示をだす。

「ポツチャマ！ムツクルにはたくや！」

ポツチャマはそれを聞きムツクルに向かっていき、手で叩く。
ムツクルはそれを受け少しよろける、そして今度は低空飛行で体当たりしてくる。

「ポツチャマ！かわしてもう一度はたく！」

「チャマ！」

その返事とともに勢い良く突っ込み、ムツクルに攻撃しダメージを与える。

ダメージを受けたムツクルは軽く吹っ飛び目を回して倒れた。

「やった！ポツチャマよくやったで！」

ホタルどや顔をするポツチャマを引き寄せ、抱き締める。

「こっちも片付いたぞ？」

「あ、トウマ！無事やったんや！」

「当たり前だろ、俺とナエトルのコンビなら負け無さ！」
「そういい、ナエトルの頭をなでる。」

はしゃいでいる2人と1羽と1匹は、他の人間の言葉で青ざめるこ

となる

「コホン、そろそろいいかな？君たち・・・」

その言葉に2人はブリキ人形が油の切れたように後ろに振り向く。

「君たちがじゃあれ合っているポケモンはもしかして、私のカバンから出したのではないのかな？」

「あ、やっべワスレタ」

その言葉を聞き顔青ざめさせる2人。

「す、すいません、わざとじゃないんです非常事態でして、ねトウマ！」

「そ、そうなんだよじゃなくてです」

それを聞き、博士は少し考え込むと難しそうな顔をしながらいう。

「君たち怪我はないか？」

その言葉に少しびびりながらかえす。

「はい、ふ、2人とも大丈夫です」

博士はそれを聞くと、無言でうなずき少し沈黙の時間が流れる。

すると出入り口から声が聞こえてくる。

「博士、待ってください」

そう言いながらくるのは先程一緒にいた、ミサカと呼ばれた少年だ。

その声を聞き静かに振り替える博士。

「ミサカくんか、研究所室で待っていていいと言っただろ」

「いやいや、そんなわけいかんでしょ・・・」

ミサカは博士の言葉を聞き、うなだれながらため息をついた。

「ふん、まあいいそれよりホタル君とトウマ君、2人とも後で隣町のマサゴタウンに来るように・・・」

博士はそう言っていると、草むらにおいてあったカバンを拾い上げ出入り口に歩いていく

だが、何かを思い出したように立ち止まる。

「ああ、それとその子は大丈夫なのか・・・」

その言葉でトウマとホタルは少女のことを思い出す。

「ああ、忘れとったあ！！」

ホタルは急いで少女のもとにかけよる。

「手に余るようなら、一緒につれてきなさい・・・」

博士はそう言いでていく。

ミサカも2人に会釈をしてから、博士の後を追い掛ける。

そして、それを見送ったトウマはただそこに立ち尽くし啞然とするだけだった。

「トウマ！そんなところでボツと立ってないで運ぶん手伝って！」
ホタルの言葉で我にかえったトウマは、急いでホタルに近づく。

「あ、ああ、今行く」

それから、2人で少女を抱えながらシンジ湖を後にしホタルの家に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1418ba/>

ダイヤモンド&パール

2012年1月3日16時49分発行